

## シンポジウム「述語部構造と表現性」の趣旨

田島 優

現在、ことばに関する研究では文法研究が盛んである。この文法研究と表現研究とを関係づけられないかと考えて、このシンポジウムを企画してみた。

日本語は膠着語であり、その述語構造は日本人の認識や思考、すなわち客観的情報から主観的情報への順に規則的に並んでいる。これは助動詞や助詞の相互承接という形で現れてくる。ただし、多くの要素がオプションであり、表現効果のために利用されたりしなかったりする。述語構造にはさらにパラディグマティックの面も関わっている。

文法研究の立場では、ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティといった名称で、日本語の述語の部分部分の研究が行われている。しかし、日本語は膠着構造の言語であるから、実際の発話や文章においては、それぞれが結び付いて出現してくる。先に述べたようにオプションな要素であるから、すべての要素が必ず用いられるものではない。どのような時にその要素を付けるのか。またその要素を付けるのにあたって、どのような要素の組み合わせが可能なのか、またどのような組み合わせが多いのか。そして表現研究の観点からいえば、それらの要素を組み合わせることによって、どのような表現効果が生じてくるのか。このような点について、明らかにする必要がある。

述語の構造も常に安定してわけではない。日本語といっても、時代によって、また地域によって、思考の発想法や、要素間の膠着性が異なっているから、必要とする要素や必要とする要素の組み合わせが異なっている。

例を挙げるなら、中古和文では助動詞や助詞は確乎たる規則性をもって承接していた。中古には他に漢文訓読文があるが、そこには漢文の語序に従った和文とは異なる承接順序があった。和文と漢文訓読文との和漢混淆により新たな承接順序が生まれたり、助動詞の複合化や淘汰が行われた。また助動詞から助詞への変化も生じている。近代語では、「ちゃった(してしまった)」や「みたいだ(をみたようだ)」のように述語全体の複合も生じている。方言でも、助動詞や終助詞などの承接が地域によって種々の様相を呈している。

このような変化や違いが、表現とどのように関わっているのかを明らかにしていくのが、この企画の課題である。

### 関連文献

田島優 (2009) 『漱石と近代日本語』(翰林書房)

田島優 (2011) 「『今昔物語集』の宣命書きによる膠着的構造に対する表現制約」(『日本文学ノート』46号)

(明治大学)